

東方アジアの概念について

渡邊 佳成*

1. 東方アジアとは

グローバル化する世界経済の動きに対して、地域経済共同体を構想し実現を目指す動きが世界各地で活発化する中で、日本や、中国、東南アジアでも、最近、「東アジア経済共同体」、「東アジア共同体」の構想が各層から提起され、ASEAN プラス 3（日中韓）を中心とする経済共同体の実現に向けての動きが始まっている（谷口 2004）。

本プロジェクト「東方アジアの文化共生・地域共生」の「東方アジア」とは、こうした「東アジア共同体」で構想されている東アジアでもなく、通常想起される日中韓を中心とした東アジアでもなく、より広く多様な社会を包含する、東アジア、東南アジア、南アジアを包括する広域的な地域枠組を意味する。

文化共生・地域共生について考え、新たな像を構築する際に、「東方アジア」というこれまでにない地域枠組を設定した意味について、ここでは考えていきたい。

1-1. 「東方アジア」という地域枠組は存在するのか、分析枠組として有効か

文化共生・地域共生の様々な有り様を明らかにしモデル化することを構想する場合、当然、同質な諸社会を包含する地域より、多様な諸社会を域内に持つ地域を研究対象とすることが求められる。その意味で、「東方アジア」は、ある一国や東アジア、南アジアといった一地域よりも、多様性に恵まれた、研究対象として最適の地域枠組であることは間違いない。

その多様性は、説明するまでもないが、以下に簡単に見ておきたい。亜寒帯から熱帯まで、砂漠気候から熱帯雨林湿潤気候まで様々な気候を有し、ヒマラヤの高地からステップ、平原、デルタ、熱帯の島々などの多様な自然環境の上で展開される人々の生活は、多岐に渡っている。様々な生態空間の中で、多様な言語を持つ様々な民族が、互いに影響を与えながら、独自の衣・食・住文化などの生活文化を形成してきた。そして、そうした生活様式に適した社会組織がそこには生まれ、宗教・信仰などの精神文化が形成されてきたし、様々な政治、経済空間がそこでは営まれてきている。

こうした多様性を域内に持つことが、文化共生・地域共生を考えていく上で有効であることは

* 岡山大学文学部助教授

間違いないが、なぜ、「東方アジア」という地域枠組を設定するのかという疑問には、多様性という答だけでは不十分であろう。多様性という点に限って言えば、「東方アジア」に限らず、他の地域枠組でもかまわないようにも思える。また、アジア全体や、世界全体を研究対象にするほうが、より広範囲にわたる多様性を念頭に置けることは説明するまでもない。にもかかわらず、「東方アジア」という地域枠組を設定するのは何故か、「東方アジア」という地域枠組が文化共生・地域共生を考える上でより有効な地域枠組であることの説明が必要であろう。その鍵は、「東方アジア」には、多様性ととともに、ある種の共通性が同時にそこに存在することである。以下に、その点を見ていきたい。

1-2. 「地域」とは

東方アジアとかアジア、東アジアといった「地域」の概念は、単なる地理的な空間の区切りではなく、世界の地表を、その文化生態的な同質性のまとまりによって、幾つかに区分する概念であることは、多くの論者がすでに述べていることである。代表的なものをあげれば、「地域」とは、「比較的明確にアイデンティファイでき、かつ多分に文化的、経済的、政治的共通性を一定程度、内部に持つ」(Sills (ed.) 1968:400) 空間であり、「その生態、そこから生まれてくる固有文化や社会、それに外来の文化、そうしたものが織り成す複合体、さらに、それが歴史的に重層、変容してできていったもの」(高谷 2001:13) である。

そして、その地理的広がりや、英語で言えば、「ローカル」、「リージョン」、「エリア」などと訳されるように、認識の有り様によって、市町村単位のみならずから域内に多くの国家を包含するものまで多岐にわたっている。また、一つの地域を構成する要素は、市町村とか国家といった固定された単位によって区切られるとは限らず、文化的広がりや経済的なつながりによって一つのまとまりとして認識される場合もある。こうした「地域」の区切りは、時には、既存の国家や民族を相対化し、様々な事象を理解するときに新たな視点を提供してくれるものでもある。

こうした地域枠組は、同じ名称でもってその枠組を名づけようと、何を基準にして一つの空間的まとまりを認識するかによって、その範囲は異なってくるし、また、その基準をどのように適用するかによっても異なってくる。そうしたフレキシビリティを持ったもの、固定されたものではないものとして、「地域」を考えておくことが必要である。そして、そのフレキシビリティは、同時代の中にも存在するし、また、時代が異なれば同じ地域名称でもその内容は大きく異なる場合も存在する。

認識主体が異なれば、当然その非固定性は、大きくなる。研究枠組として設定される「地域」が、そこに住む人々にはそのように認識されないことは、しばしば起こりうる。また、より一般的に言って、他者の認識する「地域」と当該地域の域内の人々の認識する「地域」とが必ずしも一致しない場合も多く存在する。一方で、他者の認識と域内の人々の認識が相互に作用しあっ

て、一つの地域認識が一般化され、個々の認識主体によってある種の差異は存在するが、多くの人々がほぼ同じようなイメージを抱くものとしての、「地域」が形成されていくことも多い(山室 2001)。

今日、我々がアジア、東アジア、東南アジアなどを一つの地域的まとまりとして、ある程度共通する認識を共有しているのは、以上のような歴史的な「地域」イメージの形成の過程を経た結果であることを、ここではまず確認しておきたい。

それでは、本プロジェクトが設定する「東方アジア」という枠組はそうした共通認識を将来的に有するような地域枠組として有効であろうか。以下に、アジア、東アジアなどの地域認識がどのように人々に意識されてきたのかを見ていくことによって、この問題を考えていきたい。

2. アジアとは

2-1. ヨーロッパのアジア

アジアという名称は、古代アッシリアの *asu* 「日の出」がギリシアに入って作り出された「アジア」に由来すると言われている。一方、「日没」を意味する *erebu* から作り出されたギリシア語「エウローペー」がヨーロッパの語源となる。すなわち、アッシリア帝国の版図のなかで、アッシュール、ニネヴェあたりを中心として、「日出ずる」東方と「日没する」西方を意味していた言葉が、古代ギリシアにおいて、ギリシア世界を中心としてそれぞれの東方と西方を意味するアジア、ヨーロッパという概念に徐々に変化していったのである。ギリシア人の地理認識が拡大するにつれて、アジアの範囲は拡大していき、アナトリア半島からインドのインダス川流域までを含む広大な空間がアジアとして認識されるようになる。

古代ローマでは、こうした認識が知識人の間では継承されるものの、アナトリア半島西部の地域が「属州アジア」、「固有のアシア」と呼ばれ、今日のアジアの各地はパルティア、インドア、セリカ(中国)など個々の地名を持つものとして認識されるにすぎない(伊藤 1996)。2世紀の地理学者プトレマイオスの世界図にも、アナトリア半島のところに「固有のアシア」と記述されるのみである。

それでは、今日我々がイメージするアジアという地域認識が一般化するのには、いつ頃であろうか。伊藤によれば、それは、15世紀以降の「大航海時代」を待たねばならないと言う(伊藤 1996:39)。そのことは、中世ヨーロッパの世界地図と「大航海時代」以降の世界地図を比較すれば、明らかである(Whitfield 1994; Klemp 1989)。しかし、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスなどの航海通商活動の拡大により、今日のアジアに相当する各地方の情報は詳細になっていくが、そこでの認識は、各地方の相違は考慮されず、「非ヨーロッパ」を「アジア」という一つのまとまりとして示しているのにすぎなかった。したがって、内実のない「アジア」という地域名称のみが一般化していくことになる。そして、その名前だけの「アジア」が、ヨー

ロッパによる覇権の確立とともに、地域名称として定着していくことになる。他者から与えられた名称が、ある空間を指す地理的名称以上の意味を持ち、「アジア」という一つのまとまりを持った存在として認識され、一定の特徴ある実体のあるものとして、「アジア」的〇〇とか、アジアの△△というように、今日では使われている。

それでは、ヨーロッパから「アジア」という名称を与えられた空間に住んでいた人々は、自らをどのように意識していたのだろうか、自らの世界をどのように認識し、また、周辺の世界をどのように認識していたのだろうか。そこには、「アジア」に類するような地域のまとまりの認識が存在していたのだろうか、以下に検討を加えてみたい。

2-2. 「アジア」のアジア

中国の人々は、いわゆる中華意識のもと、自らを文明の中心と位置づけ、周辺の諸地域の人々を中華文明に浴していない化外の人々と認識していたことは、よく知られている。彼らにとっては、世界は中国を中心とする世界しかあり得ず、中華以外の地域は、中華文明を知っているかそうでないかの区別しか存在しなかった。

そうした中で、いわゆる「夷狄」の地を地理的な方向性によって、おおまかに分類して記述することが行われてきた。その中で中国と海を通じてつながる広大な地理空間は、当初、南海諸国として認識されていたものが、10世紀の宋代以降に地理的な知識が拡大していくとともに、中国とマラッカ海峡を結ぶ線を境として東は「東洋」、西は「西洋」と分類されるようになる。この東西洋の分類は、16世紀以降のイエズス会宣教師の活動によって、東西軸がブルネイの西に移動する変化を生みだし、さらに西洋の中にヨーロッパが組み入れられていくことになる。そして、中国東南沿海部の人々の東南アジアへの移住の活発化によって、18世紀には、ヨーロッパを「大西洋」、今日の西アジアからインドまでを「小西洋」、今日の東南アジアを「南洋」、「東南洋」、日本周辺を「東洋」とする、より詳細な分類に変わっていく（宮崎 1942；濱下 1991）。

しかしながら、多くの地理書の記述を検討すると、こうした、東洋、西洋の認識は、単なる地理的な区分にとどまり、そこに何らかの特徴を見出すような、「地域」の認識は見られない。19世紀までの中国は、基本的に華夷の別によって世界を認識し、それを便宜的に地理的な方向性によって分類するという空間認識しか有していなかったと言ってよいだろう。

このことは、中華文明を吸収し独自の文化を發展させてきた朝鮮、日本においても、ほぼ同様のことが言える（開国百年記念文化事業会編 1978；川村 2003；鳥井 1993）。例えば、日本の場合、中華的世界観を基礎として、近世以降、朱印船時代の経験、中国、蘭学経由の西洋の地理認識を加えて形成された世界観は、中国を中心とする世界に日本をどう位置づけるかということに努力が払われてきた。本朝（日本）・震旦（中国）・天竺という三国世界観にもとづく小中華世界に琉球、朝鮮を取り込む意識はその表れであろうし、18世紀初頭の西川如見による『増補華

『夷通商考』において、海外諸国を中華・外国(中華の文字を用い三教通達の国)・外夷(中華とは異なり横文字を用いる国)に分類し、朝鮮、琉球、台湾、ベトナムを外国としているのは、中華的世界観の変形と言えるだろう。

こうした小中華意識による自らの相対化の意識は、一方で、中国経由の西洋知識(西洋系世界図)や蘭学の興隆にともない、18世紀には、中華的世界観からの解放を促していくことになる。しかしながら、双円形世界図や地理書を検討すれば明らかなように、そこで形成された地理認識は、一部に亜細亜州の外に日本を中心とする州を設定する構想は見られるものの(山室 2001; 2)、基本的には西洋の地理認識を継承したものであり、日本独自の地理認識、世界観は見あたらない。

上述の中華的世界観が日本、朝鮮、ベトナムなどの世界認識、地理認識に大きな影響を及ぼしたのと同様に、インドの世界観は、今日の東南アジアの諸地域の人々の世界観に大きな影響を与えてきただけでなく、中国、日本にも仏教的世界観を通して少なからぬ影響を及ぼしている。

ここでは、ヒンドゥーの世界観について、簡単に見ておきたい(小倉 1997; Harley & Woodward 1992; Gole 1989)。世界は、環状に連なる七つの大陸とその大陸の間の七つの大洋から成り立っている。中心にある大陸はジャンプ・ドヴィーパと呼ばれ、その中心に宇宙を貫く聖山メール(須弥山)がそびえている。ジャンプ・ドヴィーパは、東西に平行に伸びる六つの山脈と南北方向の二つの山脈によって九つのヴァルシャ(国)に分割される。最南端のバーラタ・ヴァルシャ以外は楽園で、バーラタ・ヴァルシャのみが「業」が意味を持つ土地、現実の人間世界とされている。インドの人々にとっての世界は、このバーラタ・ヴァルシャにほかならず、それらを統一することが王の理想であるとされた。

こうした須弥山宇宙観においては、周辺の諸地域は個々の国として認識されることはあっても、あるまとまりをもった「地域」として認識されることはなかったようである。そのことは、ヒンドゥーの諸文献において、今日我々が東南アジアとしてイメージする空間が、個々の港とその港が位置する国として個別に認識されるのみであることから明らかである。

こうした聖山メールとそれを取り巻く大陸から人間の世界が成り立っているという須弥山宇宙観は、ヒンドゥー教、仏教を通して、東南アジアの人々の世界観に深い影響を与えている。しかし、それは、中華的世界観が日本の変容を経たのと同様に、東南アジアにおいても、インドのものがそのままの形で人々に信じられていたわけではない。宇宙軸はより強調された形で王権と結びつき、地上の王国が大宇宙に対する小宇宙と位置づけられ、その中心に位置する王権を大宇宙の中心たる神になぞらえる構造が、より直接的に語られるとともに、建造物を通じたそのイメージ化がより明示的に行われることになる。その典型がアンコール・ワットであろう。

しかしながら、そうした王権の神格化と同時に、日本がそうであったように、東南アジアの国々においては、自らの限界を意識し、自らの位置を相対化することも同時に行われる。例え

ば、14世紀ジャワのマジャパヒト王国においては、自らを世界の中心としつつ、それと同等の存在としてインドを意識する（青山 1997）。また、18世紀ビルマのコンバウン王国も、自らを中心とする世界を意識しつつ、それと同様の小世界（中国を中心とする世界、後にはイギリスを中心とする世界）を複数対置し、理想と現実の相剋を克服しようとしていた（渡邊 2001）。

東南アジアの島嶼部では、14-15世紀以降、イスラーム化が進展していく。また、インド亜大陸においても、10世紀以降西から徐々にイスラーム化が進んでいく。したがって、今日のアジアの人々が自らをどのように認識し、周辺の諸地域をどのような枠組の中に位置づけていたのかを見るとときには、イスラームの世界観を検討しておく必要がある。

今日の西アジア地域を含めて、イスラーム世界の人々は何のような世界認識を原理的には有していたのだろうか。ここでは、イスラーム世界で盛んに著された地理書、世界図などをもとに、その世界観を概観していきたい（竹田新 1997；Harley & Woodward (eds.) 1992）。

「経度と緯度の学」に属する著作では、世界は南から北へ七つのイクリーム（気候帯）に分けられ、「国々の奇事の学」の地理書では、中央州とそれを取り巻く西方州、東方州、南東州、南西州、北東州、北西州の七つの円状のイクリーム（キシユワル、州）が世界を構成するとされている。さらに、「諸道と諸国の学」においては、イスラーム圏内の各地をイクリーム（「地方」）ごとに記述していく叙述が出現する。すなわち、イスラームの地理学においては、気候、方角、支配地域などを区分の基準として、世界を認識していくことが行われていた。

しかし、このように各種の意味を含むイクリームによって、世界を区分していく考え方が存在する一方で、イスラームの世界観には、より重要な区分法が存在していた。そこでは、世界は、イスラーム法が支配する「イスラームの家」、イスラーム法が機能しない「戦争の家」という二つ、もしくは、その中間に、ムスリムの進出に際して和平条約もしくは協定を結んだ非ムスリムの地である「和平の家」を加えて、三つに区分されていた。すなわち、ムスリムの地であるかそうでないかによって、世界を区分する考え方が一般的であり、地理書の記述も、基本的には、イスラームの地に関する記述に終始し、不信者たちの国々についてはほとんど記述されないことが一般的であった。

以上、ヨーロッパが「アジア」と名づけた地域の人々の伝統的な世界観、地理認識を概観してきたが、ここで見られるのは、基本的には自らを中心とする世界を設定し、その支配領域については何らかの基準で区分することはあっても、周辺の国々や地域について言えば、個別にそれぞれを認識するのみであって、あるまとまりを持った一つの「地域」として認識するようなことはなかったことである。中華的世界観では、華夷の別によって他者を認識し、イスラームの世界観では、イスラームの有無によって他者を弁別したが、それは自らと異なる存在を大きく一つに括るという以上のものではなかった。また、須弥山世界観も含めて、それらの世界観においては、理念的には、他者はすべて自らの支配下にあるという共通した意識が存在していたと言ってよい

だろう。

それでは、ヨーロッパが自らと異なるものをすべて「アジア」と呼んだのと同じように、その「アジア」の各地においても、他者を〇〇と呼んで一括りにする以上の何らかのまとまりは存在しなかったのであろうか。以下にその点を確認していきたい。

3. 世界システムとアジア—複数の「世界」

アジアの歴史においては、古代ペルシア帝国、中華帝国、イスラーム帝国、モンゴル帝国など、広大な支配領域を有し、多様な民族、社会を包括する大帝國が出現した時期がある。そこでは、単一の政治空間のもとで、経済的な結びつきが緊密化し、一定程度の文化的共通性が生まれていた。ある種のまとまりを持つ「地域」がそこには形成されていたことは間違いない。

しかし、そうした帝国下のまとまりのみが「地域」を形成してきたわけではない。ブローデルが『地中海』で示したような地中海世界システム (Braudel 1991-1995) が、アジアにおいても、歴史の中で存在し消長を繰り返してきたのである。帝国のような政治的な統一体ではないが、経済的な相互関係を中心に緊密なネットワークを形成し、相対的に独立した、一定の地理空間をもつ「世界システム」が各地に成立していた。そこでは、一つないし複数の支配的な中核地域(中核都市)を中心として、緊密な経済的相互関係が築かれ、そうしたネットワークの相互交通によって、内部に社会・文化的な共通性が生まれるような「世界」が、ある歴史状況のなかで成立していた。システム全体はさらに幾つかのサブシステムに分かれ、システムの参加主体ではないが、従属的な周辺地域を持っていた。こうした世界システムはもちろん固定的なものではなく、相互関係の中断によってシステムが崩壊することもあれば、中断を経て新たな相互関係のもとに復活することもある。また、サブシステムが他の世界システムと緊密になり、世界システムの構成単位が変化し、一方は拡大し、もう一方は縮小するといったことも起こっていた。

このような世界システムが、今日の西アジア、南アジア、東アジアに、それぞれ、イスラーム、ヒンドゥー教、儒教文化を核とした文化圏を築いていたことは間違いない (Abu-Lughod 2001; 西嶋定生 1983; 李 2000)。また、より広い空間をカバーするインド洋世界、東シナ海世界といった経済圏・文化圏が、歴史的に形成されていたことも明らかになりつつある (Chaudhuri 1985; 1990; 家島 1991; 1993; 濱下編 1999)。

それでは、今日東南アジアと呼ばれている地域はどうであろうか。「東南アジア」という呼称、地域概念が一般化するのとはごく最近、太平洋戦争中の日本軍の占領時代に始まることは、言うまでもない (石井 1989; 弘末 1993; 清水 1987; 矢野 1991; Emmerson 1984)。他の、東、南、西アジアのように、その全域を覆うような政治的統一体がそこに成立したこともない。民族、宗教も多様で、社会の有り様も一様ではない。そうすると、この空間には、世界システムは存在しなかったのであろうか。

しかし、この空間の歴史を概観すると、紀元後の1-2世紀、7世紀、10世紀、13-14世紀に、ほぼ時期を同じくして各地で大きな政治的変動が生じていることに気が付く。これが偶然の一致でないとする、この空間を貫く何か大きな歴史の流れが、この空間に存在していた可能性が考えられる。それが何であるかは完全には究明されているとは言えないが、その一つが交易の盛衰であったことは間違いない(西村・渡辺 2003; 蓮田 2003)。また、東南アジアの大陸部については、14世紀以降、各地において、政治統合が進展していくとともに文化的な統合もそれに伴って進んでいくという共通した現象が指摘されている(Lieberman 2003)。

そこに歴史を通じて一貫した世界システムが成立していたとは断言できないまでも、「交易の時代」と呼ばれる14-17世紀には、今日の東南アジアに、複数の中核都市を中心とした交易のネットワークが形成され、共通する文化的要素が形成されたことは、間違いない(Reid 1988; 93; 大木 1991; 弘末 2004)。

このように見ていくと、その存在形態は異なるが、今日のアジアには、歴史のある時点で、西アジア、南アジア、東南アジア、東アジアなどの世界システムが存在し、特有の文化圏がそれぞれ形成され、ある一定程度の地域的まとまりが形成されてきたと言ってよいだろう。しかしながら、これらの世界システムは、「長期の16世紀」に成立するヨーロッパの近代世界システムによって、18-19世紀には、その「半周辺」もしくは「周辺」として組み込まれていく(Wallerstein 1981; 1993; 1997)。

このグローバルな資本主義世界経済による世界の一体化によって、それまでの諸「世界システム」は崩壊していったというのが一般的理解である。しかし、最近のアジア経済史研究の進展と新しいグローバルヒストリーの展開によって、こうした見方には多くの批判がなされている(山下 2003; 秋田 2002)。以下に、本プロジェクトの「東方アジア」という地域概念とも関連させて、この問題を見ていくことにする。

4. 再び「東方アジア」とは

ウォーラーステインの近代世界システム論に対する批判の第一は、「近世」(16-18世紀)におけるアジアの優位性を主張するものである。フランクは、西欧中心主義を批判し、近世においては、中国を中心とした世界経済が展開しており、また、インド洋交易も重要な役割を果たしていたと主張しているし、ポメランツは、18世紀末から19世紀初頭のアジア経済が西欧に対して優位にあり、中国、日本、北インドにおいて市場経済が発展していたと考えている(Frank 2000; Pomeranz 2000; Gunn 2003)。

もう一つの批判は、19世紀末から20世紀前半における、世界システム内部におけるアジアの「相対的自律性」を主張するものである。第一次産品の欧米への輸出という従属的な関係に着目されがちであった従来の見方に対して、アジア域内に工業化を内に含む独自の国際分業体制が作

り出されていたことを主張する論点は、注目に値する。例えば、杉原は、「アジア間貿易論」を唱え、インド、東南アジア、中国、日本の四つの地域間の国際経済関係をとりあげ、域内の貿易が綿業基軸体制を中心として急速に発展し、域外(欧米)との貿易よりもはるかに高い成長率を示していることを実証し、それは、アジアが地域全体として欧米を中心とする世界システムから相対的自律性を獲得していったことの表現であると述べている(杉原 1996)。

また、こうしたアジア間貿易を支える人々についての研究も進展し、華僑、印僑、日本人などの多様な商人によって張りめぐらされた通商網がそこに存在していたことも明らかになりつつある(杉山・グローブ編 1999; 籠谷 2000)。この近代における通商ネットワークが、前近代との連続性のもとで形成されたのか、近代世界システムに対応する形で新たに形成されたのかについては、議論が分かれるが(濱下・川勝編 1991; 濱下 1990; 濱下 1997; 杉原 1996)、19世紀末から20世紀前半において、インドから日本にかけての広大な空間が、緊密なネットワークによって結ばれていたことは間違いない。

このネットワークとそれによって結ばれた空間こそが、本プロジェクトが考察の対象とする「東方アジア」にほかならない。

しかし、この時期のネットワーク、すなわち、籠谷の提示する「アジア国際通商秩序」は、前近代における世界システムとは異なり、そこでは、一つないし複数の中心が周辺との間に明瞭なヒエラルキーを構成しているというわけではない。ネットワーク全体を統轄するような中心はなく、複数の中心が併存し、ある種、無原則にネットワークが広がっていくという点に、近代の特徴があるように思える。したがって、中心の凝集性よりは拡散性が強調され、その結果、ネットワークの空間全体を覆うような文化圏のようなものは形成されることはなかった。近代において、ひとつの地域的まとまりを持つ「東方アジア」という「地域」が形成されたわけではないのである。

前近代においては、東アジア、東南アジア、南アジアという個別の世界システムが存在し、近代においても、それらをおおう広域的なネットワークが形成されてはいたが、それによって、「東方アジア」という新たな「世界システム」が成立したわけでもない。それであるならば、「東方アジア」という枠組は、やはり便宜的な概念枠組にすぎないのであろうか。

確かに、「東方アジア」という域内に確固たる共通性、同質性を備えた「地域」が成立していたわけではない。しかし、この空間の歴史を見れば、前近代において、東アジア世界と東南アジア世界は、東シナ海・南シナ海交易圏を形成し、常に密接な関係を築き、相互に経済的、文化的に影響を与えあってきた。また、南アジア世界と東南アジア世界は、インド洋交易圏を通じて、密接な関係を保ち、文化的にも共通する部分が存在する。そして、近代においては、上述の通商ネットワークによって、これら三つの世界は結ばれていた。このように見てくれば、「東方アジア」は東南アジア世界を媒介として、東アジアと南アジアが緩やかなまとまりを形成していると考えてもよいのではないだろうか。そして、今日もまた、ASEAN プラス3の東アジ

ア共同体の構想が実現に向けて動き出していると同時に、共同体の構想こそ生まれていないが、南アジアは急速に東南アジアとの間に密接な関係を構築しつつある（BIMST-EC（バングラデシュ・インド・ミャンマー・スリランカ・タイ経済協力機構）など）。ここでも、東南アジアを媒介として、三つの地域がゆるやかなまとまりを形成しつつある。

東南アジアを媒介とすることによって、異質なものをもちつつ、共通性をもあわせ持つ、そうした「地域」として「東方アジア」を考えることは可能であろう。そして、そうした多様の中の統一性こそ、文化共生・地域共生を考えていく「地域」として、「東方アジア」は存在する。

参考文献

- Abu-Lughod, Janet L., 1989, *Before European Hegemony: The World System A. D. 1250–1350*, New York: Oxford University Press. (佐藤次高 [ほか] 訳 2001『ヨーロッパ覇権以前：もうひとつの世界システム』岩波書店)
- 秋田茂 2002「南アジアと世界システム論」長崎暢子編『現代南アジア 1 地域研究への招待』東京大学出版会：129–149.
- 青山亨 1997「古代ジャワ社会における自己と他者—文学テクストの世界観」辛島昇・高山博編『地域の世界史 2 地域のイメージ』山川出版社：94–137.
- Braudel, Fernand, 1966 (2nd. ed., 1949), *La Méditerranée et le monde Méditerranéen à l' époque de Philippe II*. Armand Colin, Paris. (S. Reynolds trans., 1976, *The Mediterranean and the Mediterranean World in the Age of Philip II*. 2 vols. New York.) (浜名優美訳 1991『地中海 I 環境の役割』、1992『地中海 II 集団の運命と全体の動き』、1993『地中海 III 集団の運命と全体の動き 2』、1994『地中海 IV 出来事、政治、人間 1』、1995『地中海 V 出来事、政治、人間 2』藤原書店)
- Braudel, Fernand, 1979 (t. 1: 1967), *Civilisation matérielle, économie et capitalisme (XVe–XVIIIe siècle)*. t. 1.: Les structures du quotidien. t. 2.: Les jeux de l'échange. t. 3.: Le temps du monde. Paris. (S. Reynolds trans., 1981–84, *Civilization and Capitalism 15th–18th Century*. 3 vols. London.) (村上光彦訳1985『物質文明・経済・資本主義 日常性の構造』(1)(2)、山本淳一訳1988『物質文明・経済・資本主義 交換のはたらき』(1)(2)、村上光彦訳1996, 99『物質文明・経済・資本主義 世界時間』(1)(2) みすず書房)
- Chaudhuri, K. N., 1985, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge University Press.
- Chaudhuri, K. N., 1990, *Asia before Europe: Economy and Civilisation of the Indian Ocean from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge University Press.
- Emmerson, Donald K., 1984, ““Southeast Asia”: What’s in a Name?” *Journal of Southeast Asian Studies*, 15–1: 1–21.
- Frank, Andre Gunder, 1998, *Reorient: Global Economy in the Asian Age*, University of California Press. (山下範久 訳 2000『リオリエント—アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店)
- Gole, Susan, 1989, *Indian Maps and Plans: from Earliest Times to the Advent of European Surveys*, New Delhi: Manohar.
- Gunn, Geoffrey C., 2003, *First Globalization: the Eurasian Exchange, 1500–1800*, Oxford.

- 濱下武志 1990『近代中国の国際的契機：朝貢貿易システムと近代アジア』東京大学出版会
- 濱下武志 1991「中国と東南アジア」石井米雄編『講座 東南アジア学4 東南アジアの歴史』弘文堂：112-144.
- 濱下武志 1997『朝貢システムと近代アジア』岩波書店
- 濱下武志編 1999『東アジア世界の地域ネットワーク』山川出版社
- 濱下武志・辛島昇編 1997『地域の世界史1 地域史とは何か』山川出版社
- 濱下武志・川勝平太編 1991『アジア交易圏と日本工業化：1500-1900』リプロポート
- Harley, J. B. & David Woodward (eds.), 1992, *The History of Cartography*, vol.2 Book1: *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*. University of Chicago Press.
- Harley, J. B. & David Woodward (eds.), 1994, *The History of Cartography*, vol. 2 Book2: *Cartography in the Traditional East and Southeast Asian Societies*. University of Chicago Press.
- 蓮田隆志 2003「東南アジアの近世をめぐって」『東南アジア 歴史と文化』32：88-104.
- 弘末雅士 1993「東南アジア像」溝口雄三ほか編『アジアから考える1 交錯するアジア』東京大学出版会：77-104.
- 弘末雅士 2004『東南アジアの港市世界-地域社会の形成と世界秩序』岩波書店
- 石井米雄 1989「東南アジア地域認識の歩み」『上智アジア学』7：1-17.
- 石井米雄監修 1996「特集「アジア」とは何か」『国際交流』71
- 伊東俊太郎 1996「古典古代におけるアジア」『国際交流』71：36-39.
- 籠谷直人 2000『アジア国際通商秩序と近代日本』名古屋大学出版会
- 開国百年記念文化事業会編 1978(1953)『鎖国時代日本人の海外知識』原書房
- 辛島昇・高山博編 1997『地域の世界史2 地域のイメージ』山川出版社
- 川村博忠 2003『近世日本の世界像』ペリかん社
- Klemp, Egon (comp. & ed.), 1989, *Asien auf Karten von der Antike bis zur Mitte des 19. Jahrhunderts / Asia in Maps from Ancient Times to the mid-19th century*, Weinheim: VCH, Acta Humaniora.
- Lieberman, Victor, 2003, *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c. 800-1830*, vol. 1: *Integration on the Mainland*, Cambridge University Press.
- 宮崎市定 1942「南洋を東西洋に分つ根拠に就いて」『東洋史研究』7-4：1-22.
- 三好唯義編 1999『図説 世界古地図コレクション』河出書房新社
- 西嶋定生 1983『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会
- 西村昌也・渡辺佳成 2003「東南アジア「古代」・「中世」の再検討」『東南アジア 歴史と文化』32：64-87.
- 小倉泰 1997「七つの大陸と七つの海-インド人の宇宙観」辛島昇・高山博編『地域の世界史2 地域のイメージ』山川出版社：14-55.
- 大木昌 1991「東南アジア-一つの世界システム」石井米雄編『講座 東南アジア学4 東南アジアの歴史』弘文堂：145-168.
- Pomeranz, Kenneth, 2000, *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton University Press.
- Reid, Anthony, 1988, 93, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*. vol.1: *The Lands below the Winds*.

- vol.2: Expansion and Crisis. Yale UP. (平野秀秋・田中優子訳 2002 (1997)『大航海時代の東南アジア I 貿易風の下で』『大航海時代の東南アジア 2 拡張と危機』法政大学出版局)
- 李成市 2000『東アジア文化圏の形成』山川出版社
- Sills, David L. (ed.), 1968, *International Encyclopedia of the Social Sciences*, vol.1. New York.
- 清水 元 1987「近代日本における「東南アジア」地域概念の成立—小・中学校地理教科書にみる—」(1)(2)『アジア経済』28-6:2-15, 28-7:22-38.
- 杉原薫 1996『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房
- 杉山伸也・リンダ＝グローブ編 1999『近代アジアの流通ネットワーク』創文社
- 谷川稔編 2003『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社
- 谷口誠 2004『東アジア共同体—経済統合のゆくえと日本』岩波新書
- 高谷好一 2001『新編・「世界単位」から世界を見る』京都大学学術出版会
- 竹田新 1997「アラビア語地理書の世界—ムカダスィーの世界観・地域観」辛島昇・高山博編『地域の世界史 2 地域のイメージ』山川出版社:56-92.
- 鳥井裕美子 1993「近世日本のアジア認識」溝口雄三ほか編『アジアから考える 1 交錯するアジア』東京大学出版会:219-252.
- 海野一隆 2004『地図の文化史 世界と日本』八坂書房
- Wallerstein, I., 1974, 80, 89, *The Modern World System. I: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World Economy in the 16th Century. II: Mercantilism and the Consolidation of the European World-Economy, 1600-1750. III: The Second Era of Great Expansion of the Capitalist World-Economy, 1730-1840s.* Academic Press, New York. (川北稔訳1981『近代世界システム』岩波現代選書、1993『近代世界システム1600-1750 重商主義と「ヨーロッパ 世界経済」の凝集』名古屋大学出版会、1997『近代世界システム1730-1830s 大西洋革命の時代』名古屋大学出版会)
- 渡邊佳成 2001「コンバウン朝ビルマと「近代」世界」齋藤照子編『岩波講座東南アジア史 5 東南アジア世界の再編』岩波書店:129-160.
- Whitfield, Peter, 1994, *The Image of the World: 20 Centuries of World Maps*, London: The British Library.
- 家島彦一 1991『イスラム世界の形成と国際商業—国際商業ネットワークの変動を中心に』岩波書店
- 家島彦一 1993『海が創る文明—インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社
- 山室信一 2001『思想課題としてのアジア: 基軸・連鎖・投企』岩波書店
- 山室信一 2002「空間アジアをめぐる認識の拡張と変容」姜尚中ほか編『アジア新世紀 1 空間』岩波書店:29-56.
- 山下範久 2003『世界システムで読む日本』講談社選書メチエ
- 矢野暢 1991「「東南アジア」の成立」『講座東南アジア学 9 東南アジアの国際関係』弘文堂:1-28.